

---

# Who killed him ?

要徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Who killed him ?

### 【NZコード】

NZ880P

### 【作者名】

要徹

### 【あらすじ】

手袋がなくなつた。

たつたそれだけのことで始まつた、殺人事件。それはホームレスによる犯行と思われたが、その事件の裏には幾つもの影が潜んでいた。

その影とは誰か。

一体、誰が彼を殺したのか。  
誰が殺人に及ぼせたのか。

四人の人物を通して描く、とある殺人事件の裏側。

誰が、誰を殺したのだろう

。

? 冬廣瑛 | (一) (前書き)

一作田『黒い咆哮』、二作田『君へ「ありがとう」』に続く三作田となります。今までが書きためていた作品で、次回連載作品より書き下ろしとなります。

前作でもお伝えしましたが、作者の僅かながらの成長を感じてもらえばな、と思います。

身を貫き、脳の機能をも停止させてしまつよつた酷寒の中、張りつめた空氣を身にまとつて、冬廣瑛一は川原を探索していた。ある親友から、綺麗な石が川原に落ちているといつ情報を聞き、その場を目指してひたすらに歩く。

だが、その場所は担任から近づかないよう、との忠告を受けている。けれども、それを無視してでもそこへ向かう価値はあった。本当ならば、情報提供してくれた親友も一緒に来るはずだつたが、待ち合わせ場所にいつまで経つても現れないので、一人で先に目的地へと向かうことにした。

枯れたススキ、褐色の大地、セピア色の風景、薄く氷の張つた川、夏はあれだけ生い茂つていた雑草たちも、今では寒さで小さく背を縮めている。夏と冬の自然が見せるギャップが瑛一は好きだつた。時刻は十六時。まだまだ遊べる時間だ。しかし、夕陽は赤く燃え、鳥たちは家路に着こなしている。もうしばらくすれば、世界は闇に支配されるだろう。

瑛一は道端で拾つた棒きれを振り回して、枯れた草をびしひしと叩いていた。もちろん、これに意味はない。無意味な行動をするというのは、人間特有のものだ。

つい最近、音楽の授業で習つたばかりの『翼をください』を陽気に口ずさみながら、どんどんと下流にある目的地を目指していく。

川にかかる橋の上を電車が通過する。『うううう』と不快な音をたて、

奴隸たちを家へと送り届けている。僕は立派な大人になろう、などと思いながら歩き続ける。そこから更に進んでいくと、大きな橋が緩い弧を描いてかけられていた。橋の下にはブルーシートのかけられた小屋のようなものがあり、ただならぬ気配を感じた。恐怖とも、不安とも似たような何かの。

周囲に階段はなく、堤防を歩いていくことはできないし、せっかく通過した橋は車道で、歩行者のためのものではなかった。まるで、ここは密室のようだつた。瑛一は早くそこから立ち去りたかつたが、そこが目的地であることに気づくと、少し戸惑いながらも搜索を始めた。

しかし、あまり時間がなかつた。あまり遅く帰宅すれば、母親の雷が降つてくる。それだけは避けたかつた。いくらプレゼントを用意したとしても、きっと埋めきれないだらう。けれども、そんなことはお構いなしに瑛一は周囲を散策した。石がよく落ちているという草むらに入り込み、棒で草をかき分ける。瑛一は宝探しをしているようで、胸がわくわくした。

しばらくの間、草むらの搜索を続けたが、見つかったのは空き缶と、古ぼけた雑誌だけだつた。唯一、その雑誌に興味が湧いたが、持ち帰るわけにはいかないので、その場に捨てた。

「場所、間違えたのかなあ？ あいつがいれば、分かるのに」  
ぶつぶつと独り言を言いながら、橋の下のベンチに腰掛けた。

知らぬ間に、闇が空を侵食してきている。そろそろ帰らねばならなかつたが、そこでしばらく休憩することにした。決して母親が恐ろしくないわけではなく、ただ純粋に疲れていたのだ。腹も少し空いてきている。さつきから、腹の虫がうるさくてかなわない。

瑛一は黄色い手袋を取り、小さなリュックの中から水筒を取り出した。そして熱い液体を注いで、ゆっくりと飲んだ。ほうじ茶だった。これは瑛一が出掛ける前に母親が用意してくれたものだ。

瑛一の母親、冬廣麻都香は、確かに怒れば鬼のごとく恐ろしいが、普段の彼女は本当に暖かい優しさをもつた母親だ。さつき瑛一が外した黄色い手袋も彼女の手製のものだつたし、それどころか着るものまで手作りだ。彼の母親が作るものは、既製品と比べても遜色のないほどに、クラスで自慢してしまうほどによくできていた。クラスの一部の人間からは、自分も欲しい、といつような声も出てきている。

しかし、何も好き好んで手作りのものを着けているわけではなかつた。既製品を買う金が存在せず、やむを得ずに手作りするしかなかつた、というのが正直なところだ。

瑛一には、収入の要である父親がいなかつた。

数年前に、家庭は父親によつて崩壊させられた。父親は女癖が悪く、いつも麻都香と瑛一を泣かせてばかりいたし、浮氣だけにはとどまらずに、ギャンブル、DV、つまり家庭内暴力も絶えなかつたと、瑛一は母親から聞いていた。瑛一には、父親の記憶はない。

それに耐えかねた麻都香が離婚届にサインするようになに父親に迫るが、夫は受け入れなかつたため、裁判にかけた。そして、結果として離婚が成立した。

だが、麻都香の苦労はそこでは終わらなかつたし、むしろ以前よりも酷くなつた。今まで父親頼りだつた収入もなければ、今まで受けられていた保険も、何もかも失つてしまつた。三十を過ぎた彼女に就職先などあるはずもなく、パートタイマーとして日々をしのぐ生活を送ることとなつてしまつた。これならば、暴力を受けていた時期の方が安定感はあつた。子を守るために、それは耐えるべきだつたのかもしれない。

瑛一は、そんな母親の後ろ姿をずっと見てきた。そのために、瑛一は一切我が儘まねきを言わなかつたし、何かを買ってくれとねだることもなかつた。現代の子供の娛樂といえど、ゲームだと、パソコンを用いたものが主流となつてゐるが、瑛一にはそんなものは無縁だつたし、そんなものをやってみたいなんて考えたこともなかつた。やはり、外でこうやって遊んでいる方が たとえ孤独こくどくであつたとしても 楽しかつた。その点では、とても手間のかからない少年だつた。

それに、この生活が始まる前には暴力を受け、今は朝早くから仕事を向かい、夜遅くまで馬車馬のように働いている麻都香に、口が裂けてもゲームを買ってくれだなんて、そんなことは言えなかつた。このように働き続けることが人間の生きる意味なのだとすれば、本当に無駄な存在だと思つ。生きるために死ぬようなものなのだから。

少し苦めのほうじ茶を飲み終え、水筒をリュックの中にしまいこんだ。瑛一が目を細めて遠方を眺めると、ゆっくり夕陽の沈んでいく姿を見ることができた。根元の方がゆらゆらと動き、とても幻想的な雰囲気だつた。結局発見することができなかつた綺麗な石の代わりに、帰つたらこの光景を教えてあげよう、と心に留める。

夕陽の半分以上が恥ずかしそうに隠れてしまつた頃、後ろに気配を感じた。

重く、鈍く、どす黒い何かの。

瑛一の田の前に長い影が伸びてきている。瑛一の肩に皮の厚い手が置かれる。

「こんな時間まで遊んでちや駄目じゃないか……」

振り向くと、そこにはぼろぼろの布をまとった男が立っていた。恐らく、橋の下の小屋に住んでいるのだ。男は髪を夏の川原に生える雑草のように生やし、肌は浅黒かつた。その体から放出されている臭いもひどい。彼は恐怖感を覚えるような出で立ちで、ずっと見ていると泣きそうになるが瑛一はぐつと堪える。瑛一の中にある記憶が、彼を拒んでいるようだつた。

「「めんなさい、僕もう帰りますから」

リュックを背負つて、大切な手袋を着けて足早にそこを去りつとす。しかし、またも男に肩を掴まれ、その場に倒されてしまった。背負つっていたリュックのおかげで、あまり衝撃はなかつたが、冬場のコンクリートは冷たく、瑛一に更なる恐怖を抱かせた。

瑛一は小動物が猛獸に怯えているかのような目で男を見やると、男は笑つて、犬歯を鋭く光らせた。

「誰も帰りなさいなんて言つてないだろ？ どうだい、少し遊んでいいかないか？」

男の笑みは、紛れもない偽物だと瑛一は勘付いた。子供というのは純粹な心を持っているがゆえに、真実を見抜く力を持つている。

今、男の笑顔の裏に明らかな悪意を感じた。

「お母さんに怒られちゃうんで、ごめんなさい」  
服に付着した土ぼこりを払い、小さく頭を下げる。しかし、男は納得する様子もなく、誘い続ける。

「いいじゃないか、ちょっとくらい。一人で寂しいんだよ。ね？」  
リュックに手を引っかけ、瑛一を逃がすまいとしている。  
「離してよ！ 門限過ぎちゃう」

瑛一は男の手を払いのけ、睨みつけた。その目が気に食わなかつたのか、敬語を使うことをやめたことが不愉快だつたのは分からないうが、男の表情が豹変した。悪意を内包した笑顔から、殺氣をまとつた形相へと。

「おい、俺が寂しいって言つてるんだよ。ちょっとくらい一緒にいてくれてもいいじゃねえか。そんなに麻都香が好きか！ なら、とつとと帰りやがれ！」

今までの温和な口調とはうつてかわつて、ものすごい剣幕で瑛一を怒鳴りつけた。今日まで母親くらいにしか怒鳴られたことのなかつた瑛一は、その迫力の違いに驚愕し、急いでリュックを背負つて無言で走り去つた。

なんで母さんの名前を知つていたんだろう。

電車が通っていた橋のあたりまで来て、やつと瑛一は足をとめた。息が切れ、気持ちが悪かった。嘔吐しそうな気分になりながらも、瑛一は冷静になろうとした。

口から白く色づいた吐息が吐きだされる。

時刻は何時だろうか。すっかり日は落ちて、やかましく啼き続けていた鳥たちの声も聞こえない。それどころか、人の気配すらも消え去り、電灯も存在しない河原はひどく氣味が悪かった。気温も下がってきており、瑛一の体温を奪っていく。

手を口の前に持ってきて息を吐き、わずかな暖をとる。

と、その時。瑛一は何かが足りないことに気がついた。

「あれ？」

思わず口に出してしまったほどだつた。瑛一は暗闇の中でリュックを下ろして中を探つてみたが、水筒と懐中電灯しか入つていなかつた。瑛一は、黄色い手袋の右手側を失くしてしまつていた。あの男に怒鳴られたあの時だらうか。

あの手袋は、多忙な母親の愛情が詰まつた大切なものだ。それを失くしてしまはんて、僕は馬鹿だ、などと思いつつ後悔の海に沈んだ。手袋は取り返したい。だが、あの男にもう一度顔を合わせれ

ば一体何をされるか分かったものではなかつた。それに、あの男のいた場所で手袋を失くしたとも限らない。走つてきている最中に落としたかもしれないのだ。

瑛一の額に汗がにじみ出していく。寒いはずなのに汗をかくだなんて、人間という生物は本当に面白いと思つ。

リュックの中に入つていた懐中電灯を手にして、瑛一は通つた道の搜索を始めた。

まず枯れ果てた草むらに入り、丸い光をくまなく当てていつた。スポットライトのように照らされた部分は、誰も楽しませる気のないステージのように殺風景だつた。そのステージに、黄色い手袋の姿はない。あつちこつちに視線をやつては、部分、部分を凝視していく。しかし、どこにも落ちてなどいなかつた。

寒さは夕方よりもさらに厳しくなり、瑛一の運動機能を徐々に奪つていく。手袋を着けていない右手がじんじんとする。

懐中電灯を持っている右手にほとんど感覚はなく、牡丹色にかじかんでいた。 そういえば、手袋を買つてもうう狐の話を学校で習つたな。確か『手袋を買ひに』だつたつけ。

そんなことを頭の片隅で考へると、少しだけ笑いが込み上げてきた。何が楽しいのか、何が笑いを起こさせるのかはまったく理解できなかつたが、ただただ愉快に感じた。

北風が瑛一の頬を打ちつけるので、瑛一はコートの襟を立てて手袋を探すことにした。こうすると、幾分か頬に刺さる風はましになつた気がした。けれども、鼻の奥に鋭い風が入り込むと、皮膚に棘が突き刺さつたように不快になつた。あまりその風を吸い込まない

よつて、ゆつくつと息をする。

しばらくの間草むらを探し続けたが、やはり手袋は姿を現さなかつた。黄色という配色から目立つことは確かだが、この暗闇のせいか、中々見つからない。

徐々に、徐々にあの男のいた橋が近づいてくる。瑛一はそれが嫌で嫌で仕方がなかつた。だからか、あの男に近づくまい、絶対にこつちに落ちているはずだと、根拠ないことを考えて近づかないようにした。だが、瑛一の苦労は無駄だつた。瑛一の願いに反して、愛しい手袋は姿を現さなかつた。

瑛一は、小さくため息をついて決心した。男の元まで、搜索範囲を拡大するのだ。そこで見つからなければ、母親に泣いて謝ろうと思つた。それほどまでに、あの手袋は大事なものなのだ。

ゆつくり、それでいて着実に橋が近づいてくる。大きく威圧感を覚えるその風貌は、まるで巨人のようだつた。大きく開いた橋の下は口に見える。巨人の口へと辿りつくと、瑛一は明かりを小屋の方に移したが、何の反応もなかつた。そこに男が佇んでいなかつただけで、瑛一の心は幾分か安定した。今まで怯えていた自分が馬鹿みたいだつた。

橋の下には数個の街灯が取り付けられていたので、懐中電灯は不要だつた。

電源を切り、気を取り直して、手袋の搜索を始める。座つていたベンチから、小屋の近く、そして行つてもいない橋の向こう。ありとあらゆる場所を探し、残すところはベンチの目の前にある草むらだけとなつた。もうここに存在しなければ、手袋はあの世にでも旅立つてゐることだらう。

草むらに入り、氣合を入れ直した時だつた。背後に重い氣配を感じた。

「おや？　おじさんか恋しくなつたのかな？」

あの男だつた。大きく口元を歪ませて瑛一を見下ろしている。ここで怯んでは元も子もないと感じた瑛一は、意を決して訊ねてみることにした。

「あの……。僕の手袋知りませんか？」

「どんなのなんだい？」

「どうやらやつきの」とは気にしてはいないらしく、にこやかな表情で瑛一の話を聞いていた。しかし、裏で何を企んでいるかなんて分かりはしない。

「これくらいの大きさで、色は黄色なんです」「ジオスチャーで大きさを示すが、実物を差し出した方が早いと思い、左手にはめていた手袋を男に見せた。

「これが」

「はい。さっきここで落としたと思うんですけど」

まじまじと黄色い手袋を見つめて、男はしきりにうなずいている。決して、それは意味のある行動とは思えない。それでも男はそれをやめなかつた。

「どこのかで見た気がするなあ

「どこので！　どこので見たんですか！」

「思い出すから黙つてろ」

また男は考えるふりを始めた。だが、瑛一は純粋な気持ちで男の回答を待つた。寒さと恐怖、そして焦燥感から、震えが止まらなか

つた。一刻も早く帰宅して、せつと心配してくるであつた母親を安心させてやりたかった。

「思に出したぞー。」ぽんと手を叩き、男はうそうそとつまづいた。  
「あの黄色い手袋は、あそいで見かけた」

「え？」

男が小屋の方を指さす。そこでは、一斗缶が暖かな光を放ち、ごうごうと炎が燃え盛つていた。暖房代わりだらう。それを見ても意味の解らなかつた瑛一は、さうに問いかける。

「どうこうとですか？」

「頭の悪い子供に育つたもんだ。あの一斗缶の中だよ。せひ、よく燃えてるだらう？ 感謝してるぜ」けらけらと男が笑へ。「本当によく燃えてやがる」

体中の血液が沸騰し、そのすべてが頭に昇つてくるような錯覚に瑛一は襲われ、冷たかつたはずの体が異常なまでに熱く感じられ、その時、間違いなく、瑛一は怒りと強い憎悪に染められていた。

「殺してやるー。」

そう叫んだ次の瞬間には、その小さな拳で男を殴りつけていた。

何度も、何度も、何度も。

小さな体にあるすべての力で、男を憎しみと怒りに身を任せて殴続けた。その姿はまるで猛り（たけ）狂う（くる）獣のようだつた。

た。しかし、子供の力というものは程度が知れている。次は男が瑛二に馬乗りになつての反撃が始まった。今度は瑛二が一方的に殴られる側となり、何度も意識が飛びそうな感覚に襲われた。

固く、重い拳が頬骨に打ちつけられ、息をすることがやつとだつた。瑛二の体から、徐々に力が抜けていった。視界がかすみ、この世の終わりが見えた。

お母さん、お父さんからこんなことされてたんだ……。

と、その時。小屋の付近に円形の光があてられた。

涙と血液でぼやけた風景の中には、紛れもない母親、麻都香の姿があつた。そして、その傍にはニット帽を被つた男がいた。男と麻都香が何やら叫んでいるように見えるが、意識の薄れている瑛二には聞きとることができなかつた。

あつと、僕のことを怒つてるんだ……。

ニット帽の男は、瑛二の上に乗つていてる男を引きはがし、数発殴つた後に彼を羽交い絞めにした。瑛二を殴つていた男が何やらこちらを向いて叫んでいる。

羽交い絞めにしている男は、隣家に住む東岸敦司であると気づいた。どうやら、麻都香が瑛二のことを心配して協力してもらつたらしい。

麻都香が大粒の涙を流しながら瑛二の元へ駆けつけた。

「エイちゃん！」

瑛一の視界にくしゃくしゃになつた母親の顔が映る。普段見ている明るい笑顔でなかつたことに、瑛一は少しの戸惑いを覚えた。薄い紅色をしているはずの頬も、綺麗に整えられているはずの髪も、すべてが瑛一の知つている麻都香ではなかつた。

「ヒイちゃん。何でこんなことに……」

片手で瑛一の頭を持ち上げ、膝の上に置いた。そして両手で口を覆い、大きな声で泣き始めた。

「……お母さん」

やつとのことで、瑛一は口を開くことができた。上手く声を発することができないので、ゆっくり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「う、めんね。手袋……失くしちやつた」

力なく、鯉のよつよつよつよつと口を動かしていく。口元にはどす黒い血液が付着していく、その周囲は青紫色をしていた。相当な力で殴られ続けたのだ。

「そんなの、どうでもいいじゃな……」

「どうでも良くなんてない　母さんの作ってくれた大事な　」

視界が前にも増してぼやけてくる。

「大事な手袋を燃やされたんだつ……」

瑛一はもうあまり残つていない力を振り絞り、麻都香の手を握つた。

麻都香の頬に付着した涙が凍りはじめていた。鼻水を垂れ流し、

必死に瑛一を慰めようと/or。

「エイちゃん……」みんなに手、冷たくして……」

麻都香は瑛一の右手をそっと両手で包みこみ、額をあてた。冷たく冷え切った瑛一の手は、死人かと間違つてしまいそうになるほどに体温が存在しなかつた。

「手袋なんて、お母さんがまた作るから。だから、早く病院行って、元気になろうね」

麻都香は、瑛一の手をより一層強く握つた。

「うん…… ありがとひ、お母さん」

その言葉を最後に、瑛一の意識は途切れた。

羽毛のように優しく、シルクのようになめらかな手で握られた右手は、毛糸の手袋をしている左手よりも暖かかく、彼女に手を握られていると、それだけ救われる気がした。

雪が、一人の頭上で乱舞している。

瑛一は、麻都香の温かな手をぎゅっと握り続けた。

瑛一が川原のホームレス……いや、冬廣麻都香の元夫である、梅が池宏忠に暴行を受け死亡した事件から、五年が経過していた。今日は、あの日のように酷い寒さで、外の世界は雪化粧をしていた。家で飼っている猫も外には出ようとせず、床暖房の上でぬぐぬぐと過ごしている。

冬廣麻都香は、じたばたと階段を上つていく。

「英吾！ いい加減起きなさい」  
部屋で眠っている東岸英吾の部屋の前で、麻都香が叫ぶ。  
「起きなさいって！」  
「ひるさいなあ！」

「じそじそ」と、布団が擦れる音がする。恐らく、また布団へもぐり、夢の中へと落ちていったのだろう。

一体、いつから彼はこんなにも怠け者になってしまったのだろう、私の教育が間違っていたのだろうか、彼に対する愛が足りないのだろうか、などと朝から思考を巡らせる。

東岸英吾は、小さい頃は素直で、行儀の良い子だったはずなのに。人間という生き物はどう成長するか分からぬということを、麻都香は身をもつて味わっていた。

彼の部屋を後にして、麻都香はキッチンで朝食の準備を始めた。

卵をフライパンに割り、レタスをちぎり、コーヒーの粉末をカップに入れ、トースターに食パンを入れる。毎日変わらない動作。目玉焼きが完成すると同時に、新しい父親の東岸敦司とうがんあつしが寝ぼけ眼ひげをこすりながら起きてきた。青い、縦じまの寝巻を着たままで、髭ひげが顔中を覆っている。

麻都香は、あの事件の時に親切にしてもらつた敦司と再婚した。

瑛二が死に、生きる希望などすべてを失つた時、敦司が慰めの言葉をかけてくれた。乾ききつた心に、敦司の潤いをもたらす言葉がじわりと染み込んだ。

麻都香も、敦司も離婚歴りこんれきがあつたために、互いの傷を舐めあうには最適の組み合わせだつた。それに、家庭内暴力で悩んでいたという点もまったくもつて同じだつた。それに加えて、結婚する前からある程度の交友関係があつたからか、結婚までの道のりはいたつてスムーズだつた。もちろん、敦司に子供がいることも知つていたし、以前住んでいた我が家に遊びに来たこともあつた。

「おはよう、麻都香。あいつはまだ起きてこないのか？」

「ええ……。起こしはしたんだけど」

「仕方のない奴だ……。まったくあいつだけは出来損ないだよ」

敦司は椅子に腰かけ、テーブルに置いてあつた朝刊を手に取つて読みはじめた。麻都香は「あなたからも言つてよ」と言おうとしたが、気分を害されるのも嫌なので、その言葉は呑み込んでおいた。もう、離婚というつまらない理由で子供を巻き込みたくはなかつたし、英吾への愛がその制止をより強くした。

トーストが出来上がり、芳醇はうじゆんな香りがキッチンに満ちている時、

英吾は起きてきた。彼もまた、父親の敦司と同じじよつに田をひさりながら、それでいて不機嫌そうな顔で起きてきた。やはり、子供は父親の背中を見て育つのだな。

「あ、英吾、朝ごはんよ」

「いらない。もう時間ないだろ」

とてもではないが、親にきく口ではない。苛立つ氣持ちを抑えながら、あくまで温厚な口調で言つ。

「朝ごはんは大事なのよ？ 食べなきや」

「時間がないって言つてるんだよー。わざわざ着替え持つてこよー！」

「お前っ！ 母さんになんて口をきくんだ！」

朝刊を投げ捨て、敦司が襟元を掴み、ものすごい剣幕で怒鳴りつける。だが、決して殴りかかるとはしなかった。それは、敦司の信念でもあった。

英吾は反抗的な目つきで敦司を睨みつけていた。

麻都香は、慌てて止めに入る。

「やめて、あなた！ 『ごめんね、英吾。お母さんが悪かったから…』。お願いだからやめて……」

お互に舌打ちをしてから、英吾は解放された。彼は、鋭い目で両親をさらに睨みつけ、去つて行つた。

「お前が甘やかすからこいつなったんだぞ？」

「そうかもね……。ねえ、あなた？」

「なんだ？」

新聞から目を離さずに、敦司が答える。

「今度の休日にでも、家族で遊びに行かない？ ずっと、家族で一

緒にいたことなんてないし、それに

「馬鹿。俺が忙しいことくらい知つてるだろ? お前らに構つてやつている暇なんてないんだ。まったく、朝から気分の悪い……」

「『めんなさい、敦司さん……』

自嘲気味に麻都香は笑い、着替えを取りに行くことにした。

ひのき  
檜で出来たクローゼットの中から制服を取り出し、引きこもつているだろ?、憎たらしく成長した息子の元へと持つていく。途中の廊下がやけに軋み、我が家家の老朽化を、身をもつて感じた。

再婚すれば、きっと私は幸せになれる。麻都香はそう確信していたのだが、現実は決して甘いものではなかつた。真の姿はというとただただ残酷なだけで、ちつとも幸せではなかつた。

経済状況こそ改善され、麻都香は専業主婦でいることができたが、息子が非行にはじることにより、その尻拭いに追われてしまつことになつた。

敦司はといふと、仕事人間で夜遅くまで勤務しているし、休みの日も、彼には一切かかわらなかつた。そんな日々に、麻都香は嫌気がさしてはいたが、また離婚という決断をすれば、今度は更に生活的に困窮する「ことだろ?」。

こんな境遇に耐えられるのは、これも、それも英吾への愛があつてこそものだつた。麻都香は、敦司の心遣いに惹かれて結婚したのではなく、その子供である英吾のために結婚したのだつた。瑛二に味わわせた寂しさを一度と繰り返させない為に。

仮に、敦司に英吾がいなかつたとすれば、間違いなく再婚はしていないし、したとしても即離婚するという末路を辿つたことだろ?。もしかすれば、自殺という道を選択してはいたかも知れない。今までの生きる目的は、瑛二の死という形で終わつていたのだから。

麻都香は、過去のトラウマの疼きを抑えながら、息子の部屋の扉をノックする。右手には綺麗に畳まれた黒い制服と、黄色い手袋が持たれている。

「セー、置いといてよ」

扉すら開けずに答えている。

「お母さん、手袋作ったから、これ着けていってね」

「あー、分かったよ」

言葉からも分かるほどに面倒臭そうだ。時間がないと言いつつも、きっと部屋の中で新しいゲームをプレイしているのだろう。その証拠に、中から電子音が絶え間なく聞こえてきている。遅刻せずに学校へ行く気など、初めからないことを麻都香は知っている。

「行つてくるぞ！」

階下から敦司の声が聞こえたので、返事をする。

「行つてらっしゃい。今日も遅くなるの？」

声なんて聞こえていない。

都合の悪いことからは目を逸らし、自分の作りだした心地好い世界に陶酔する。それは夫の悪い癖だ。

彼と再婚して、初めのうちはとても良くしてくれたことを、麻都香は鮮明に記憶していた。しかし、ここ何年かの間に愛は冷めきってしまったのか、最近では性交渉すらない。会社が忙しいということは重々承知しているが、こんな生活には耐えられなかつた。

キッチンへと戻り、朝食の続きをとる。ゆっくりと咀嚼しながら食べていると、朝のワイドショーで八時が知らされた。もう今から学校へ行こうとも遅刻することは確定だ。しかし、英吾は今も階上から降りてこない。

いい加減にしなければ、と椅子から立ち上がった時、階上から彼は降りてきた。制服をきつちりと着込み、しつかりと手袋をしていった。さすがに、そこまで薄情には育つていなかつたようだ。そして、英吾は無言で出ていった。

あの時瑛一が着けていたものと同じ、黄色い手袋。

懐かしい過去の記憶に漫り、あの時の貧しいながらも幸せだった、瑛一に愛されていた季節を思い出す。

たつた一つの手袋のために血まみれになつた瑛一。麻都香は、彼が愛おしくてならなかつた。同時に、瑛一の方も麻都香を愛していたのだろう。様々なことを思い起こすと、ほろりと涙が零れ落ちてきた。麻都香はそれを人差し指で拭つて、朝食の片付けを始めた。

かちやかちやと、皿同士が擦れ合う音だけが響く。

「まうひとつしながら、瑛一のことと思い返す。

あの時、誰と川原へ行くつもりだつたんだろう。

それは、麻都香の五年前からの疑問だつた。それに、瑛一が危険だと言われ続けていた川原へ足を運んだ理由も分からぬ。分かつていることといえば、彼の手袋が片方無くなつていたことだけだつた。

瑛一は手袋が燃やされたと言つていたが、どうにも釈然としなかつた。なぜ、わざわざ燃やす必要があつたのだろうか。放り投げれば済む話ではないか。そこまでして手袋の存在を消したかったのはなぜなのだろう。元夫の性格は、麻都香が一番よく知つている。そこまで深く考えて行動するタイプではない。

皿の割れる甲高い音で、麻都香ははつと我にかかる。

足元を見ると、フローリングに割れた皿の破片が飛び散っていた。もやもやとした気持ちを抑え、破片を拾つ。

そういえば……。

今日は短縮授業だつたということを麻都香は思い出した。昼ごろには帰宅するはずなので、昼食を用意しておかなければならぬ。きっと、朝食を食べていないのでよく食べる事だろつ。

麻都香は冷蔵庫の中を確認して、買い出しをする必要がないことを確認した。

時刻は十時。彼が帰つてくるまでに掃除を済ませたかつた。その後には、ついて来るかは分からぬが、彼を連れて瑛一の墓参りに行こうと計画していた。

麻都香は、居間中の埃をはたきで落として回り、手際よく掃除機をかけ始めた。すると、ぬくぬくと過ごしていた猫が驚いて跳ね上がり、開け放していった窓から飛び出していくつた。その、あまりの慌てぶりに麻都香は微かにほほ笑んだ。

掃除機は旧式で、未だに紙パックを装着して使用するものだつた。麻都香は、紙パックの中身に注意しながら掃除を続ける。フローリングを雑巾で丁寧に磨くことも忘れない。

「そりいえば、英吾、最近部屋を掃除していないわね  
掃除機を担ぎ上げ、麻都香は英吾の部屋へと向かう。

彼の部屋の前に立つた時、麻都香は不思議と胸が痛んだ。勝手に掃除をしても良いものだろうか、と。今まで、英吾自身から入室を禁じられていたために、麻都香は一度も彼の部屋に入つたことはなかった。

「のまま去つた方が良いのだろうか。

麻都香の心の中で葛藤が始まる。天使はプライバシーを守れと言い、悪魔は息子の健康のためだと誘惑した。

結局、葛藤は悪魔が勝利した。

麻都香は今まで触れることのなかつたノブに手をかけ、ゆっくりとそれを下におりした。

中に入った瞬間、麻都香の顔は歪んだ。

部屋の中は、ひどい臭いだった。男性特有の皮脂と汗の匂い、そして精液の匂い。それらが混ざり合つたこの臭いは、何とも形容しがたかった。それだけではなく、英吾は見られないと分かっているからなのか、成人雑誌も放り出していた。普通、然るべき場所に隠しておくものだろう。

布団も黄ばみ、至る所に埃が溜まっていた。テレビも、ゲーム機の電源もつけっぱなし。麻都香はその電源を切り、まずは布団を干すこととした。

窓を開き、新鮮な空気を部屋中に満たす。それから、布団を持ち上げると、多量の埃が舞い上がり、麻都香の肺を汚していった。麻都香は力一杯にそれを担ぎ、窓の方へと持つていった。

ベルランダに布団を干して、それをはたいていると、道路に小さな子供を連れた女性がいた。仲良く手を繋ぎ、昼食について語り合つ

てこる。一人はとても幸せそうで、麻都香は、瑛一がいた頃の生活を思い出した。

あの頃は、本当に幸せだったなあ……。

田をじすり、麻都香は掃除を再開する。

じ、布団のあつた場所を見てみると、何やら手帳のようなものが五冊放置されていた。どうやら、布団の下に敷かれていたようである。麻都香はそれを手に取り、中身を覗いた。

日付は一〇〇五年の一月一四日から始まっている。

田記帳か。

「の田は、瑛一が死んだ日?」

むりくつと<sup>ページ</sup>を捲つて(めぐ)いた手が、どんどん早くなる。

読み進めていくと、嫌な汗が止まらなくなつた。

麻都香は、田記を一通り読み終えると、掃除を中断して居間へと戻つた。

それどころではなかつた。

心臓が高鳴り、息が荒くなつていた。

見ていけないものを、麻都香は見てしまった。

時刻は十三時前。そろそろ英吾が帰宅する時間だ。もはや、この後のことなんて、頭の片隅にもなかつた。麻都香は、心臓が飛び出

しそうになるのを抑えつつ、何とかして気を紛らわせるために、昼食の準備を行つた。だが、昼食の支度をしている間も、気分は落ち着かなかつた。

直に帰宅すると思つていた英吾は、昼の一時を過ぎても帰宅しなかつた。どこかで遊んでいるのだろうが、麻都香は心配でならなかつた。

あの時の瑛一も、いやつて中々帰つてこなかつた。それで、重い腰を上げ、やつと見つけたと思ったらあの結果だった。なぜ自分はもつと早くに警察へ連絡して、瑛一を救い出すことができなかつたのか、悔やんでも悔やみきれなかつた。けれども、今さらそんなことを考へても遅い。

麻都香は、小さくため息をつき、料理にラップを被せた。

ボオン、ボオン、ボオン、ボオン、ボオン……。

彼が帰宅しないまま、十八時を知らせる音が鳴った。テーブルに置かれた料理は冷え切り、まるであの時の瑛一のようだった。

冷たくなり、抱きしめれば熱いほどの体温はどこにもなく、触れるだけで恐怖するほど冷たかった。もう一度と味わいたくはない。

それから三十分ほどが経過した時、玄関の扉が開いた。やっと帰ってきた、そう思ったが、帰宅したのは敦司だった。すっかり疲れた顔をしている。やはり、敦司に息子のことを一任することは避けた方が良さそうだった。何か一つ刺激を与えるべく、すべてが崩れ去つてしまいそうだった。敦司には、何も頼れない。

「今年は、墓参りに行つてないのか」

「今日はそれどころじゃなかつたわ」

背広を受け取りながら、麻都香が答える。

「あいつはまだ帰つてきていののか？」

ネクタイを緩めながら麻都香に訊ねる。

「今日は早いつて言つてたのに、心配だわ」

「心配なら、探しにでも行くか？ あの時みたいに暴力事件に巻き

込まれているかもしれん」

敦司のその無神経な言葉に、麻都香は思わず戦慄した。考えたくないことだった。また尊い命が危険に晒されるのかと思うと、震え

が止まらなかつた。

「じゃあ、私が見て」よつかしら

「やめとけ、やめとけ。冗談だよ。あんなことは滅多に起らぬもんだ。心配するだけ無駄だよ。黙つて、座つて待つてこよ。そうだ、「一ヒーでも飲めば落ち着くかも知れないぞ」

「そつかしら……」

腑ふに落ちない、とこりょうな表情を浮かべ、麻都香はため息をついた。

敦司が、こんなにも薄情な人間だとは思つていなかつた。血の繫がつた我が息子が危険に晒されているかも知れないというのに、なぜこんな呑気なことが言えるのだろうか。麻都香は、心の底から敦司が嫌になつた。

「やつぱり駄目！ 私、探してくるわ」

決意を固め、椅子から立ち上がつた時、電子音が鳴つた。

「はい、冬廣……申し訳ありません、東岸です」

今日はいつも増して過去を思い出していたせいか、どうにも旧姓と間違えてしまつ。

『A警察署の者です。夜分遅くに申し訳ありません。おたくの息子さんが傷害事件に巻き込まれましてね。一度、署まで来ていただけませんか？ そこで詳しい事情をお話しましょ。受付で甘利と言えば通してくれますので』

言つだけ言って、甘利という刑事は電話を切つてしまつた。たとえ切られなかつたとしても、麻都香にはまともに答えられるだけの

力はなかつた。

体から血の気が引いていき、麻都香はその場に倒れ込んだ。

「おい、麻都香！ 一体どうしたんだ」  
敦司が麻都香の元へ駆けつけ、体を支える。

「傷害事件に巻き込まれたって……」

「あいつがか！」

麻都香は小さくうなづく。

さすがの敦司も、驚きを隠せないよつだつた。

「俺が行こうか？」

「ううん、私が行つてくるわ」

そう言つと、麻都香は白いコートを羽織つて家を出でいった。母は強し、というべきか、麻都香の足取りはしつかりとしていて、まるでさつきの衝撃など感じていないようだつた。きっと、衝撃よりも子を想う力の方が強いのだ。それがたとえ、血の繋がつていない子供であつても。

夜の外気は異常に冷たく、ちらほらと雪まで降り始めている。路面が凍結しているので、滑らないように歩かなければならなかつた。このような状況で、ますますあの時を思い出した。

瑛一が暴力事件に巻き込まれて、彼女が東岸敦司の家へ捜索を依頼しに行つた時と、まったく同じ気持ちだつた。違うことと言えば、家の所在くらいのものだ。

幸い、A警察署は近所にあり、そこへ辿りつくまでの間に怪我をするといつような無様なことはなかつた。受付で甘利の名を告げる  
と、取調室という何とも大そうな部屋へと案内された。

その部屋では、不貞腐れた顔をして、そっぽ向いた我が息子がいた。彼の目の前には、火の消された煙草が一本入れられた、銀色の灰皿が置かれていた。

煙草を吸つたのかしら。

取調室の空氣は重く、想像していた以上に息苦しかった。

「東岸さんですね？ どうぞ、こちらへ座つてください。私が先程お電話をした甘利です」

甘利という男は煙草を咥えながら軽く会釈をして、麻都香の隣に腰かけた。とても威圧的で、優しい口調の中にも悪を許さない正義が隠されていそうだ、と麻都香は思った。

「さて……息子さんに言いたいことは山ほどあるでしょうが、まずは私が経緯を説明しましょウ」

息を大きく吸い、甘利は説明を始めた。

「東岸英吾くんは、工高等学校の近くにある公園にいたところ、同校の三年生一人に暴行を受けました。そして これは正当防衛ですが、彼は一人の後頭部を石で打ちつけました。今、彼らは病院で治療を受けています」

「あの……その子たちは、その……助かるんですか？」

「ええ、命に別条はないようです」

それを聞き、麻都香は胸を撫で下ろした。これで、殺人犯にでもなつてしまつたら、彼の人生の幕は早くも降ろされてしまつただろう。最悪の展開を避けられたことは、かなり大きかった。

「良かつた……」

「それでですね。とりあえずは、釈放どころになつています。また後日来てもうひとつになるかもしませんので、その時はよろしくお願ひします」

甘利は煙草を深々と吸い、火を揉み消した。

「申し訳ありませんでした……」

深々と頭を下げ、麻都香たちは警察署を後にした。

英吾は、終始無言であった。

粉雪の舞い散る外に出た時には、空にぽつかりと薄い黄金色をまとった月が浮かんでいた。雲ひとつ確認できないほど、闇に染まつた空は澄んでいた。月の他にも様々な星たちが光を放つが、その光は濁つてはいるように見えた。

「ねえ……英吾。何であんなことをしたの？」  
「もじもじ」としながら、英吾が答える。

「燃やされたから」

「え？」

「せつかく作ってくれた手袋燃やされたから。だから……」

悔しいのか、英吾は拳を強く握つている。

「やうなの……。分かつたわ、また作つてあげる」

彼は右手を差し出し、手を繋ぐとする。彼の右手は素手で、牡丹色に染まり、とても寒そうだった。だが、麻都香はあの時の瑛二にしたように、彼の手を握ることはできなかつた。

「ありがとう、麻都香さん」

英吾は、今までに見せたことのないような、屈託のない笑みを浮かべた。再婚してから、彼がこんな笑顔を見せたことは初めてだつ

た。

「いい加減、私のことお母さんって呼んでくれないかな？」  
ふつ、とため息交じりに言い、言葉の最後をぼやかせる。

「……ありがと、お母さん」

田に涙を溜めながら、彼は下を向いて立る。

麻都香は心の隙間に、今は聞くことのできない息子の『お母さん』  
という言葉を詰め込んだ。しかし、その隙間を埋めるには、あまり  
にも不完全な言葉だった。偽りの言葉では、麻都香の心は満たされ  
なかつた。

闇の支配する空には満天の星たち。瑛一と一緒に眺めていたかつ  
たこの空を、今、再婚相手の息子と眺めながら歩いている。この場  
に瑛一がいれば、彼は一体どう感じるだろう。

手袋のようにずっと一人一緒にいられたら、どれだけ素晴らしい  
ことだらうか。だが、もうそれは叶わぬ夢であり、星に願つても、  
神に祈つても、未来永劫実現することのない夢だ。今ではもう失わ  
れてしまつた、あの小さな黄色い手袋のように、永遠に一人は離れ  
たまま、一度と一緒になることはない。

もし、天国とつものが存在するならば、きっと瑛一はそこで両  
方の手袋を嬉しそうに着けていることだらう。

麻都香が「き瑛一」のことを考えていると、何かが崩壊したかのよ  
うに、幼児退行をしてしまつたかのように、突然英吾が泣き始めた。

「どうしたの？」

涙を両手で拭いながら、英吾が口を開く。

「「めんなさこ……」

東岸英吾は、公園のベンチで、手袋を片手に薄ら笑いを浮かべている。何も嬉しいことがあったわけではない。ただ、己の愚かさに笑いが止まらなかつた。

夕焼けによつて、歪んだ顔にはでこぼこの影ができ、そんな彼を馬鹿にするかのように鳥が啼いている。

人のいない公園で、過去を思い起す。

冬廣瑛二が死んだあの日のことを。

そして、まとわりつく罪悪のことを。

「川原に探検でもしに行こりうよ」

それが、冬廣瑛二を危険だと再三言われ続けていた川原へと誘いだした言葉である。川原には、数年前より一人の氣狂いの男が住んでいると教師からの通達があり、そこには決して近づいてはいけないと言われていた。

「嫌だよ。ずっと前から近づいちゃ駄目だつて言われてるし」

冬廣瑛二の返答はもつともなものだった。しかし、英吾は瑛二の心を動かす手段を知つていた。そんなつまらない規則を容易く破つてしまふほどの。

「あそここそ、綺麗な石があるんだよ。俺、この前内緒で行つたんだけど、宝石っぽいのが沢山あつたよ。それにさ、瑛二のお母さんの誕生日つてもうすぐなんだろ？ それ、プレゼントしたらどう？」

包含している黒い塊は表に出さず、笑顔で英吾は言つ。もちろん、英吾の言つたことは、内緒で行ったという部分以外は嘘だ。宝石なんてひとかけらも落ちてゐるはずがないし、確かに気が狂つた男が小屋に住んでいた。試しに近寄つてみたところ、凄まじい怒声で追い返された。あれは危険だ。

「なんで知つてるの？ お母さんの誕生日が近いって」

英吾は、この返答に窮<sup>きまう</sup>した。

「あれ？ 前に瑛一<sup>一</sup>が言つてたんだよ？」

嘘だつた。

真実はといふと、変態的なまでに冬廣麻都香のことを溺愛している、父、敦司に訊いたのである。敦司は以前から冬廣家で出たゴミを漁り、麻都香の私物を物色するほどに麻都香のことを深く愛していた。麻都香の茶色い髪の毛や、化粧品、下着など、敦司の収集癖は過剰さを増し、ついには生理用品にまで手を出したほどだ。

離婚の原因是妻による子への暴力だと、敦司は言い続けているが、実際は変質者の敦司に、妻の方が愛想を尽かしたのだろう、と英吾はずつと考えていた。なぜなら、彼自身には母親から暴力を振るわれた記憶などないからだ。それどころか、英吾は母親から深く愛されていたことを覚えている。記憶にはないが、体がそれをしつかりと覚えていた。今では感じることのできない、母親の愛を冬廣麻都香という一人の女に、英吾の母親は奪われたといつても過言ではないのだ。しかし、英吾は麻都香のことを恨みはしなかつた。むしろ、憎しみの矛先は父親である敦司に向けられていた。

そんな英吾のことなど考へもしない敦司は、麻都香が離婚をしたという話を聞いた途端に、アピールを仕掛けた。金銭的な援助をし、相談にも乗り、仕事場までの送り迎えまでした。もちろん、その間

も「ミミ収集は欠かさなかつたし、情報もしつかり仕入れていた。我が子である英吾を使って、だ。

しかし、今のところその恋が実るということではなく、せいぜい、親切なご近所さんというレベルの話だった。麻都香が眞実を知れば、一体敦司はどういう目で見られるだろう、と想像するだけで背筋がぞくぞくした。英吾もまた、父と同じくして変質者なのかも知れなかつた。

「そうだっけ……」

怪訝けげん そうな顔をして、瑛一が戸惑戸惑う。

「そうだよ。で、どうする？ 行く？」

「んー……英吾も来てくれるんだよね？」

「もちろん。俺たち、親友だろ？」

親友だろ？ そんな言葉を口にする奴ほど相手のことを親友だなんて思つてはいない。英吾にとつて瑛一は、麻都香を手に入れるための道具でしかなかつた。少なくとも、瑛一の家庭が崩壊した後からは。

「じゃあ、行く！」

ぱつと明るい表情になり、無垢な笑みを浮かべる。英吾も一緒に笑うが、その笑顔は時間の経過した血液のようにどす黒かつた。

「じゃあ、今日授業が終わつたら行こう。ちょっと家で準備があるから、先に川原へ行つてくれよ。それと、このことは誰にも内緒だからな！」

「うん、分かつた！」

時刻は十五時と少し。

川原へ一緒に行く気など、英吾には最初から微塵もなかつた。

英吾は帰宅すると同時に、隣家である冬廣家を窺つた。ちょうど、英吾の自室から瑛一の部屋が少し覗き見られるのだ。瑛一は嬉しそうな面持ちでリュックに道具を詰め込んでいた。その少し奥では、敦司が愛してやまない麻都香が、台所に立つて何か作業をしていた。その姿をじつと見つめていると、水筒に液体を入れ始めたので、ようやく作業の意味が分かつた。愛する我が子が、外で凍えないようにといふ配慮だ。それを受け取り、リュックに詰め込む瑛一の笑顔に、英吾は嫉妬の炎を燃やした。

しばらくすると、瑛一がリュックを背負つて出でていこうとしたが、麻都香が呼びとめたようで、何やら口を動かしている。麻都香は箪笥から黄色い手袋を取り出して、瑛一に手渡していた。あれは、手作りなのだろうか、と英吾は反射的に思つた。そして、英吾は手に持つていた市販の手袋を握りしめ、嫉妬を強めた。

瑛一が家を飛び出していく後、英吾は物思いにふけつた。ちらりと見える麻都香を見てはため息をつき、息子のために夕食の下ごしらえをする彼女に想いを集中させた。

ぼうつと麻都香を見つめていると、英吾の下半身は自然と硬直した。

滑らかに流れる髪、程良くなついた肉、化粧氣のほとんどない細い顔、小さく膨らんでいる乳房。

そのすべてが英吾を魅了した。敦司の話によると、麻都香は現在三五歳であるようだが、そんなものはどうでも良かった。恋に年齢なんて関係ないのだ。英吾は、この感情が何なのか分からなかつたが、少しでも麻都香のそばに近寄りたかつた。そして、甘い体臭を嗅ぎたかつた。

まだ記憶もほとんどない年齢の時に母親と引きはがされた英吾は、女性というものを何も知らなかつたし、母親がいることによる幸せというものも知らなかつた。しかし、瑛一はそれを知つているのだ。英吾は、それが知りたくてならなかつた。

瑛一は、小学校の中でも最貧の家庭である。なのに、瑛一はいつも笑顔だつた。服、靴、文房具はぼろぼろで、漫画やゲームになんて一度も触れたことがないのに、常に楽しそうだつた。それと対を為すように、英吾の家庭は母親こそいないものの裕福だつた。しかし、心に大きく開いた空洞は、金というただの紙切れでは埋まらなかつたし、漫画やゲームの幻想に浸れば虚しいだけだつた。

心の空洞を埋めるために、英吾は幾度となく麻都香の元を訪ねた。その度に、麻都香は英吾に対し優しく接してくれたし、軽く抱きしめてくれたこともあつた。だが、空洞は埋まらなかつた。やはり、麻都香という女性を手に入れなくてはならないのだ。

英吾は、時計を確認し、誰もいない部屋から飛び出した。

向かつた先は、冬廣家だつた。

恐らく、今日冬廣瑛一は川原にいる氣狂いに暴力を振るわれ、あ

わよくば殺され、麻都香からあの眩しいまでの笑顔は消え失せるだらう。今日は、その見納めというわけである。もちろん、暴力を振るわれる保証も、ましてや殺される保証もない。しかし、瑛一から麻都香を奪い取るには、これ以外に方法が思いつかなかつた。

古ぼけたアパートの一階に、愛しい彼女は住んでゐる。階段を構成するコンクリートは躊躇が入つており、所々にゴミが散乱していた。ここに一家が揃つて住んでいたのかと思うと、英吾は冬廣家に同情せざるを得なかつた。何でも、瑛一の父親は女癖が悪く、ギャンブルに深くのめり込んでいたらしい。だとすれば、父親がいてこの住居というのにも頷ける。

赤い錆の浮いた扉には、インターフォンはついていなかつたので、英吾は扉をノックする。扉の右上にある換気扇から、生ぬるい風が流れてくる。そして、あたかも友達を呼びに来た、という風な声色を使う。乾いた音の後に、ハープのように澄んだ声が聞こえてきた。英吾は、その声を聞くたびに心癒された。

扉が開かれると、当然のことながら、さつき覗き見た麻都香その人が現れた。どうやら英吾がここへ向かうまでの間に水仕事をしていたらしく、布のエプロンで手を拭いていた。

「あら、英吾君。いらっしゃい」

「瑛一君はいますか?」

「いないことなんて知つてゐるのに、英吾は訊いた。

英吾は、じうやつて嘘がぽろぽろと出でることに感心していた。

「瑛一なら、一足先に出て行つたわよ? なんでも、探検に行くんですつて。誰と行くの? つて訊いても、秘密つて言つちやつて。ふふ、お年頃なのかしらね」

口元に手を当て、上品に笑つた。

こんなに美しい存在が、こんな汚らわしい場所にいる。美しい女性と、崩れゆく廃屋。あまりにも不釣り合いなその光景に、英吾は少しだけ笑つた。それは、ある意味、究極の美への同意なのかもしれない。もしかすると、敦司もこの美しいに気づいているのかもしない、と英吾は思つた。

「そうですか、残念です……」

落ち込むふりをして、麻都香の同情を貰う。こうすれば、いつも彼女は必ず家の中へあげてくれた。英吾は、少しでも麻都香の笑顔を心に焼き付け、母親といつもの温かさを感じていたかった。

「ちょっと、あがつていいく？ お茶がさつき湧いたから、飲んでいいつて」

案の定、麻都香は英吾を家に招き入れてくれた。

六畳一間の小さな部屋で、入口の近くに台所があつた。居間兼瑛二の勉強スペースと見られる部屋は整理整頓が行き届いており、一つ一つの物自体は汚らしげ、それでも見苦しくは見えなかつた。

逆に、英吾の住んでいる家はといえば、最新の家具や、綺麗なフローリングが張り巡らされてはいるものの、敦司は掃除が嫌いなためにそれらすべてが靈んで見える。整理されている物といえば、麻都香の私物くらいのものだつた。

英吾が居間でそわそわとしていると、麻都香が茶を持ってきた。

「ほうじ茶だけど、どうぞ」

「ありがとうございます」

英吾は、早速ほうじ茶に口をつけた。

「熱つ」

苦さよりも何よりも、熱さが英吾の舌を襲つた。さすがに、ここ

までは予想していなかつた。

「あら、大丈夫？」

麻都香は英吾の隣に座り、様子を窺つてゐる。

英吾は、自分の体に、微弱な電流のようなものが流れたことを感じた。憧れの母親の体がすぐそばにあり、やろうと思えば、今すぐにでも彼女に抱きつくことのできる距離まで近寄つてゐる。想像とまったく同じ、首筋から香る甘い匂いに、英吾は深い感慨を覚えた。しかし、今まで、丸い座卓を挟んでしか接近したことのなかつた英吾は、緊張で体が硬直してしまつた。こんなチャンスは滅多にないのに。

「あ、大丈夫です。ちょっと舌を火傷しただけです」

慌ててその場を取り繕つ。

「ふふ。そういうおつちょいちょいなところ、瑛二とそつくり。あの子もね、つい最近お茶で舌を火傷したの」

「そうなんですか？」

麻都香は小さく頷き、こくこくと笑つた。

こんな他愛のないことで笑える家庭とは、どんなに素晴らしいことなのだろうか、と英吾は思つた。いや、これは一般的な家庭であれば当たり前のことなのだ。しかし、英吾にはその当たり前がない。これは、どれだけ悲しいことだろうか。

その当たり前が、自分だけのものになる時を想像すると、嬉しさで身が震えた。もちろん、それを手に入れるためには冬廣瑛二が死ぬだけでは不十分だ。もう一段階上へ進ませなければならぬ。何もかもが不確定なこの計画は、子供ならではだ。

しばらくの間、英吾は母親の優しさと温かさに触れ続けたが、そ

の間、瑛一が今どうなっているのか、知りたくて仕方がなかつた。もつあの男に襲われているだらうか。彼が襲われてからが、英吾の計画の始まりなのだから。

「すみません、そろそろ塾があるので帰りますね」

「あら、わう? またいつでも遊びに来てね」

名残惜しい母の愛を残して、英吾は瑛一の様子を窺いに、川原へと繰り出すことにした。

東岸英吾が川原へと向かう時には、周囲はかなり暗かつた。住宅街では電灯が灯りはじめ、ちらほらと帰宅してきているサラリーマンが見られる。子供たちも、暖かな我が家へと帰つていく。

そんな中、英吾は急ぎ足で川原へと歩を進めた。目的地へと近づくにつれて胸が躍り、人が死ぬかも知れないというのに気分は高まつていく一方だった。友人の死よりも、己の欲望が満たされることの方が強かつた。

川原へと辿りつくと、英吾は瑛一の辿つたであろう道を、堤防の上から辿つて行つた。

列車の通る橋を抜け、しばらく行つたところにある橋の下で、二つの人影を確認することができた。

田を凝らしてみると、小さい方が冬廣瑛一で、もう片方が例の男であることを認知できた。

一人は何やらもめており、瑛一が一步、また一步と後ずさつていた。男の方はとすると、怒声を飛ばして、小さな子供を威嚇していた。

ここまで都合よくいっているとは、予想していなかつた。確かに、英吾はすべての事柄がうまく運ぶことを渴望していしたが、いざうまく事が運んでいると、思わず戸惑つてしまつ。しかし、英吾にもう

まくいく保証がなかつたわけではない。なぜなら、英吾は、あのホームレスの男が瑛二の父親であることを知つていたからだ。

冬廣瑛二の父親、梅池宏忠は八年前、妻と離婚した。彼は、離婚調停から人生が崩れ始めた。

妻がいなくなつた途端に、彼のリミッタが外れ、以前にも増して女遊びやギャンブルに手を染めるようになった。それらは一度はまりこめば容易く抜け出せるものではなかつた。

貯金が有り余るほどあつた最初は良かつた。しかし、時が経つにつれて、砂の山が崩れるかのごとく貯金はなくなり、それに伴つて女も彼から遠ざかつていつた。その腹いせにギャンブルに打ち込むが、結果として借金だけが残つてしまつた。そうして首が回らなくなり、今に至るわけである。

ではなぜ、それで息子である瑛二を恨まなくてはならないか。その理由は、ただの逆恨みであろうと英吾は考へてゐる。歪曲して物事を考へるならば、麻都香さえ家庭環境に満足していれば離婚せずに、今まで通りリミッタが取り付けられた状態でいることができたのだ。当然、その離婚の原因となつた息子へも、憎しみの矛先が向くわけである。

その情報源もまた、東岸敦司だつた。

英吾がのんびりと言い争う光景を眺めていると、瑛二が走り去つて行つた。思わず目を見開き、計画の失敗を悟つた。本来ならば、ここで瑛二は何らかの形で傷を負ははずだつた。だが、瑛二は傷一つ負わずに去つていつてしまつた。梅池も、黙つて小屋へと戻つてしまつた。

英吾は斜面を下つていき、一人が言い争つていた場に、血の一つも流れていなことを確認した。

やつぱり駄目か……。

ふと足元に目をやると、黄色い手袋が無造作に放り投げられていた。これは、窓から覗き見ていた時、瑛一が麻都香から手渡された手袋に違ひなかつた。

欲しくて仕方がなかつた手袋が、今日の前にある。

英吾は、それを黙つてコートのポケットに押し込むと、また急な斜面を一気に駆け上つた。

麻都香の作った手袋を手に入れられただけで満足を得た英吾は、元来た道を辿つた。すると、何やら川原の方に細長い光と、丸い光の一いつが輝いていた。暗闇の中でも目を細めて見ていると、瑛一がまた戻つてきていた。手袋を探しにきていたことは容易に察することができた。

英吾は、またそこでしゃがみこむ。

瑛一が草むらの方を探索していると、梅池が小屋から出てきた。

瑛一が梅池の存在に気づく。

何やら話しているが、川の流れる音が邪魔して聞きとれない。

瑛一が梅池に殴りかかつた。

殺してやる！ といつ声が微かに聞こえる。

英吾は戦慄した。自分が奪ったこの手袋が、瑛一を狂氣へと驅り立てたのだ。ポケットに押し込まれた手袋をぎゅっと握りしめ、ただただ獣のように荒れ狂う瑛一を見つめた。瑛一が攻撃していたのはほんの数秒だったが、英吾には数時間にも感じられた。

今度は、瑛一が殴られている。

自分の思っていた展開。

寸分違わぬ展開。

自分が望んでいたはずなのに、その光景はおぞましかった。

見ているだけなのに血が引いていくような感覚に襲われ、躰が震えて仕方なかつた。決して寒いからではなく、声も出せずに、人の命が消えようとしている今に恐怖していたからだつた。ぬいぐるみのようにただ為されるがままで、もう死んでいるのではないかと思つほどだつた。

もうやめてくれ！ そう叫ぼうとした時、あの愛しい麻都香が、敦司を連れて瑛一を救い出した。梅池は敦司に羽交い絞めにされ、身動きが取れないようだつた。

英吾はそれを見て胸を撫で下ろしたが、ぴくりとも動かぬ瑛一を皿にして、また鼓動が速くなつた。

麻都香が瑛一の手を握りしめている。

がつくりと左手が垂れ下がり、動く気配すら感じられなかつた。

麻都香は、赤ん坊のような大声を出して泣き叫んでいる。

英吾は、胸が張り裂けそうな思いに駆られた。

ただ、母親の愛が欲しかつただけだつたのに。

ただ、瑛一のように手を握つてほしかつただけなのに。

たつたこれだけのことで、こんな思いをするくらいなら、始めからやらなければ良かつた。そう思つが、すべては手遅れだつた。

冬廣瑛一は、搬送先の病院で死亡が確認され、東岸英吾に残つたのは、悔恨の念と、小さな黄色い手袋だけだつた。

それから数年後、東岸敦司と冬廣麻都香は結婚した。

これも、英吾の想像していたことだつたし、望んでいたことだつた。結婚してくれれば、麻都香は自分の母親となるのだから。これで、英吾が欲していた母親も、そして愛も、両方を手に入れた。

しかし、英吾の心は満たされないでいた。麻都香から注がれる愛情は偽りであることを英吾は悟つた。それに気づいた英吾は、日に日に非行にはしるようになつた。

だが、どれだけ暴れても、どれだけ両親に当たり散らしても、ただ麻都香の愛が遠のくだけで、何の意味もなかつた。時が経過すればするほど、英吾は愛を感じられなくなつていつた。

あれだけ欲しかつたはずのものが、いざ手に入つてみると、ただの塵と化すとは、あの時は思いもしなかつた。遠くから眺めている時は眩く輝く宝石だつたのに、触れてみれば、それはただのまやか

しに過ぎなかつた。英吾は、幻のために瑛一を殺してしまつた。

後悔の海に沈む度に、英吾はあの時拾つた手袋を握りしめて、謝つた。

親友だと偽つて、騙して殺してしまつて、麻都香を奪つて、手袋を拾つてしまつて……。

思えば、あの手袋さえ英吾が拾つていなければ、瑛一は無事に帰宅できたのだ。あの日の英吾の行動すべてが瑛一を殺した凶器だった。

英吾は、年を取るにつれて子供の頃の純粋な心、嫉妬、欲望などの感情が剥がれ落ち、ただの罪、後悔、絶望、恐怖を包含する心になつてしまつっていた。あの時の純粋な心でいられたら、どれだけ気が楽だつただろうか。

今では、麻都香の顔を見ることすら辛い。

樂になりたい。英吾は本心からそう思つた。

瑛二が殺された日から、丁度五年の月日が経過した。

その日も、いつもどおりに麻都香が彼を起こしにきた。本来ならば感謝しなければならないのに、英吾は麻都香を邪険に扱い、突き放した。機嫌が悪いわけでも、何でもなかつた。英吾は、今日が一年のうちで最も罪の意識が最大化される日、つまり、今日が瑛二の命日であることを覚えていた。そんな日に、麻都香の顔を直視すれば、思わず謝つてしまいそうだった。今さら洗いざらい白状したからといって、自分の罪が消えるものではないことは、重々承知していた。

躰を起こすことが億劫おっくうだつたが、着替えを取りに行かなくてはならなかつた。制服は大事に一階のクローゼットにしまわれている。

部屋を出て、ゆつくり階段を下つていくと、居間の方から話し声が聞こえた。

「あいつはまだ起きてこないのか？」

「ええ……。起こしはしたんだけど」

「仕方のない奴だ……。まつたくあいつだけは出来損ないだよ」

気に食わなかつた。再婚することができたのを自分の力だと思い込んで、お高くとまつている。小さな頃から好かなかつたが、今はその時以上に嫌つてゐる。

英吾が今に顔を出すと、何とも気まずそうな表情をして、麻都香が口を開く。

「あ、エイちゃん、朝<sup>あさ</sup>はんよ」

食欲なんてなかつた。

「いらないよ。もう時間ないだろ」

時間なんて関係なかつた。

「朝<sup>あさ</sup>はんは大事なのよ？ 食べなきや」

「時間がなって言つてるんだよ！ わたわと着替え持つてこよ

！ 遅刻しちゃうだろ！」

そんな汚い言葉を吐くつもりなんてなかつた。

「お前っ！ 母さんになんて口をきくんだ！」

父、敦司が英吾の胸倉を掴んだ。英吾は反抗的な目つきで父親を睨みつける。この行動だけは、彼の本心からくるものだった。

「やめて、あなた！ 『ごめんね、エイちゃん。お母さんが悪かったから……。お願ひだからやめて……』

麻都香さんは悪くない！ そう言おうと彼女を見たが、言えなかつた。その悲しそうな顔が、冬廣瑛<sup>ヒロマツ</sup>の死亡した時の彼女の顔と重なつた。後数秒彼女の顔を見ていれば、きっと英吾は泣いていた。

敦司から解放された英吾は、着替えを持つてくるように麻都香に言つだけ言つて、部屋へと戻つた。  
階段を上つている最中、また癪<sup>しゃく</sup>に障る言葉が囁かれていた。

「お前が甘やかすからこいつなつたんだぞ？」

「そうかもね……」

悪いのは全部お前だ！

舌打ちをして、英吾は血室に閉じこもる。

英吾の部屋は荒れていって、高校で貰ったプリンタや書類などが部屋中に散乱していた。布団も、ずっと干していない。そんな中で、唯一片付けられている物が、瑛二の手袋だった。

テレビの電源を入れて、ゲーム機を起動させる。適当なディスクを入れ、プレイデモを流す。音だけ聞けば、ゲームをプレイしているように感じるだろう。

英吾は本棚に置いてある小さな木箱の中から、あの時、瑛二と離れになつた孤独な手袋を取り出して、それを両手で握りしめ、泣いた。何年もこうして泣いてきたからか、涙の染み込んだ手袋の色は褪せて、毛糸もほつれてきていた。

しんしんと泣いていると、扉がノックされた。涙を見られるわけにはいかない。

「やー、置いといとよ」「よ

震えそうになる声を抑えながら答える。

「お母さん、手袋作つたから、これ着けていってね」

「あー、分かつた分かつた」

一刻も早く、麻都香には去つてもらいたかった。

もう、幾度となく彼女は手袋を作つてくれていた。その度、英吾は手袋を引き裂き、しばらくはそうしたことを黙つておき、追及されたら答えることにしていた。英吾にとっての手袋とは、瑛二の残したそれしか有り得なかつた。

それからしばらく泣いた後に、家を出て行くことにした。

学校へ行くことが面倒でならなかつたが、さすがに、このまま家にいるのは気不味かつた。なぜなら、このまま部屋に籠つていたとすれば、麻都香と顔を合わせる危険が高まるからだ。そうなることは避けたかつた。

制服を出来る限りきちんと着て、麻都香手製の手袋を無理矢理に装着する。そして、学校指定鞄を背負つて、また階下へと降りて行つた。

玄関へ向かう前に、麻都香の憂い顔が覗き見られた。今にも泣きだしそうで、少し触れただけで壊れそうな気さえした。英吾は、彼女が心配でならなかつたが、敢えて無視をして出て行くことにした。

家を出ると、英吾は手袋を外し、それを引き裂いた。手袋は瑛二の物以外に有利得ないとは言つたが、手袋を引き裂く理由は何もそれだけではなかつた。

あの手袋は、サイズが瑛二の物と一緒にだつた。

高校生である英吾に、小学生が着けるような手袋が合ひはずもない。そのことは麻都香も理解しているだらう。しかし、麻都香はそのことをまるで知らないかのように、毎回同じ型の物を作り続けてゐる。

麻都香は無意識に瑛二のサイズに合わせて手袋を作つていた。

忘れられないのだ。あの愛しい息子のことが。

今でも、彼女は梅池によつて奪われたと思つてゐるだらう。それ

に、英吾が関わっていることを知れば、彼女の気は狂ってしまうだ  
らう。

英吾は、手袋を引き裂いた罪悪感と、騙しとおしてこる今に絶望  
しながら、当てもなくぶらついた。

部屋から持ってきた瑛一の手袋を握りしめながら、ふらふらと。

十六時。英吾は沈みゆく夕陽の光で、はつと我に返つた。

英吾は、結局一日をこの公園で過ごした。この公園は、高校からも距離があり、自宅からも相当な距離があるし、知り合いに出会う確率もかなり低かった。ましてや、家族に見つかる心配など電程にもなかつた。

ちらほらと帰宅する学生が見られる。彼らは例外なくほほ笑み、放課後という自由時間を満喫しようとしている。

彼らの中の、一体何人が英吾と同じように、人に決して言うことができない秘密があるのだろうか。恐らく、一人としてそんな人間はいないだろう。

英吾には、あの汚れのない笑顔が憎らしかつた。できることならば、今すぐにでも彼らの顔を一人一人叩き潰して、俺は人殺したんだ、と叫びたかった。英吾を抑えるものがなければ、実際そうしていただろう。衝動を抑えていたのは、あの手袋だった。

ベンチに座つて、黄色い手袋を見ていると、自分の愚かさに笑いが込み上げ、涙があふれて仕方がなかつた。涙を抑えるためにぎゅっと目を瞑るが、まつたくの無意味だった。まぶたの隙間から熱い液体があふれ出し、止まらなかつた。涙は頬を伝い、口へと侵入していく。夕陽が、視界を赤く染める。

と、その視界が急に暗くなる。

英吾は急いで涙をぬぐつ。そして見上げてみると、髪を金に染め、制服をだらしなく着込んでいる男子学生が一人、英吾の目の前に立っていた。彼らは英吾のクラスの一員だった。だが彼らは、下等な生物を見下すかのような目で英吾を見ている。

「何か用かよ」

不快感を露わにして、英吾が言う。

「おい、英吾。今日が何の日だったか分かってんのか？」

「知るかよ」

「テストだよ！ お前、昨日カンニングさせてやるつて言つたじゃねえか！ お前が来なかつたせいで散々だつたぜ！」

彼らの言つたことは真実だつた。英吾は、昨日に答案を見せてやると、安請け合いをしていた。それを頼りとしていたのか、彼らは一切対策を講じていなかつたようだ。

「そりやあ悪かつた」

「謝つて許せるわけねえだろつ。もう赤点は確定、留年も確定だ。どうしてくれんだ？」

「自業自得だろつ」

英吾は鼻で笑い、その場を立ち去ろうとした瞬間、学生のうちの一人が英吾を細かい砂の集まつた大地へと押し倒した。英吾は後頭部を大地に打ちつけ、鉄の味を味わつた。そして、その拍子に手袋が落下した。

英吾に怒声を浴びせていた男が手袋を拾い上げる。

「だつせえ手袋だな。こんなの着けてんのか？」

「そんなもん、俺の勝手だろ。放つとけよ」

「おい、あんまり反抗的な態度取つてんじゃないよ。」

人一倍躰が大きいであろう男が、英吾を後ろから拘束した。あまりの圧迫感に、英吾は思わずむせ返つた。内臓が徐々に押し潰されていいくようだつた。

「本当にだつせえ手袋……」

手袋を拾い上げた男は、まじまじとそれを眺める。

「おい……触れんなつ！」

「反抗的。これ、大事なんだろ？！」

男は英吾の前にしゃがみこみ、田の前に手袋をちらつかせる。

「約束を守れなかつた英吾君には、お仕置きだな」

そう言つと、男は懐から煙草を取り出し、点火した。そして、ゆっくりと煙を吐き出すと、煙草を手袋へと押し当てる。

「やめろー。」

じわじわと、手袋に火が移り、黄色い手袋が揺らめく炎と共に消え去つていき、黒い灰が音もなく崩れていふ。

炎が勢いを増していく。

瑛一の、麻都香の、そして英吾の手袋が燃える。

英吾の網膜に、ゅうゅう踊る炎が焼きつぐ。

手袋がただの灰となるまで、五分もからなかつた。

涙が、ダムが決壊したかのように流れてくれる。

「おー、こいつ泣いてるぜ」

圧し掛かっていた男が英吾から降り、彼を見下してけらけらと笑つた。不愉快で、殺したくなる。

「俺を裏切るとこいつなるんだよー 覚えとけー」

二人が背を向ける。

英吾は氣づかれなつよう立上り、手近に落ちていた石を拾い上げる。

ゆつくつと男たちに近づいていく。

そして重く、凹凸の激しい石を男たちの後頭部へと 。

耳を劈く（つぶさむ） 憃哭。

發せられない言葉。

崩れ落ちていく軀。

醜い血。

動かない四肢。

僕は……。

次に英吾が見た光景は、眩しい赤い光を放つ、白と黒の混じった車と、血だまりの中で顔を突つ伏している二人組だった。一人ともぴくぴくと躰を痙攣させ、必死に生きようとしていた。あまりにも滑稽なその光景に、英吾は思わず笑いそうになつた。

「君がやつたのか？」

突然、青い制服を着た男が話しかけてきた。彼は何やら胸のポケットから取り出し、英吾に提示した。そこに記載、A警察署、甘利という文字が見られた。どうやら、警察官のようだ。いつの間にここへ来たのだろうか。

「はい」

「君も、すっかりやられたようだね。多分、正当防衛ということになるだろ？ けど、あのまま彼らを殺していたら、そつはいかなかつただろう？ ね」

「生きてるんですか？」

「どうせなら死んでくれればよかつたのに、と心の中で毒づいた。

「ああ。死ななくて良かつたと思うがな。その腕章を見るに、君はI高校の一年生だろ？ これから進路に影響しないように、穩便

な対処をしてもらえるだろ？」「う

「そうですか。それはありがたいですね」

まるで、人を殺そうとしたことに、何も感じていなかのようだ  
冷徹な表情を浮かべ、英吾が答える。

今回は、瑛一を間接的に殺したこととは、訳が違った。彼らの無  
防備な後頭部に石を打ち付けることに、何の躊躇い（ためら）もな  
かつたし、殴り倒した後も、眉ひとつ動かさず、まつ毛の一本も搖  
れなかつた。

きっと、あの時梅池に襲いかかつた時の瑛一も、英吾と同じ気持  
ちだつただろう。梅池をあの時、殺してしまつっていたとしても、何  
の後悔もなかつたはずだ。それどころか、快感すら覚えたかもしれ  
ない。

英吾は甘利に連れられ、警察車両でA警察署へと連行された。

取調室で、英吾は待機させられていた。

避けられないことだと分かつてはいたが、いざ親を呼ばれるとなると緊張した。しかし、ここに訪れるのは敦司であることは分かつていたので、麻都香が来るよりも心は安定していた。

麻都香は、今日、瑛二の墓参りへと行く予定なのだった。墓自体は近所の靈園にあるので時間はかかるないが、彼女は墓参りに行くと、決まって夜遅くに帰つてくる。だから、今この時間に麻都香がここへ駆けつけてくる可能性はないと考えた。

電話を終えた甘利が帰つてきた。

「なんであんなことをしたんだ？」

両親のことは一切話をせずに訊ねる。

「大切な手袋を燃やされたんですね」

「手袋？」

「現場に落ちていませんでしたか？ 今はもう、灰になっちゃつてると思いますけどね」

皮肉を込め、英吾が言つ。

「たつたそれだけのことと、あいつらを」

「あなたにとつては、たつたそれだけのことでしょうね。でも、僕

「……」とつては、命を奪われるよりも重要なことなんですね

「理解しづらい話だな」

「でしょ」つね

じぎゅうの間、冷たい取調室を沈黙が支配する。

「でも……その気持ち、解らないでもないな」

小さくため息をつき、甘利が煙草に火をつけた。

「…………」  
「わういえば、俺は、昔おやじに作つてもうつた竹馬を壊されたことがあるな。あの時は悔しかつたね。今のお前と、似たような感情だつたと思つよ」

「あれは、僕のものじゃないんですね」

「なに?」

「あれは、僕の親友の手袋なんです。冬廣瑛一ひとつ名前を聞いたことがありませんか? 五年前、ホームレスから暴行を受けて、小学生が殺された事件」

「ああ、聞いたことがあるな」

苦虫を噛み潰したかのような顔をして、甘利が答える。

「その被害者の子が持つていた手袋なんです」

甘利が煙を吐き出す。

「なるほど……。その手袋は、形見みたいなもんだったってことか」

「形見、ですか。そう言えばそうかもしれないですね」

「そりやあ、怒るわな。少しだが、お前に同情するよ。…………どうだ

? 煙草を一本吸つてみないか? ちょっとは気が紛れるかも知れん

「貰います」

青い箱から煙草を一本取り出して、英吾に差し出した。英吾はそ

れを咥え、慣れない手つきで火をつけた。すうつと吸い、そのまま青い煙を吐き出した。肺に入れれば咽る（むせ）ことを英吾は知っていた。

煙草の先で小さく光る赤い塊を見ていると、手袋が燃えていく様を鮮明に思い出すことができた。できることならば、あの時、自分も一緒に燃え尽きてしまったかった。そうなれば、今頃、すべての罪から解放されていたはずなのに。

英吾の持っていた煙草がすっかり灰になり、甘利が一本目の煙草に火をつけた時、英吾の親が取調室に入ってきた。

英吾の予想は裏切られた。

そこには、墓参りに行っているはずの麻都香がいた。麻都香は、瑛二が死んだ時と、寸分違わぬ表情をしていた。目を真つ赤にして、髪を振り乱し、美しさが完全に枯れ果てた顔。

英吾は、必死になつて麻都香から目を逸らした。

そんな英吾を無視して、甘利が経緯を説明している。

ちらり、ちらりと麻都香の様子を横目で窺う。彼女の表情は、どんどん曇つていいく一方だった。目の端には涙を溜め、今にも泣きだしそうだった。こんな義理の息子に、ここまで親身になつてくれている麻都香に、英吾は心から嬉しさを覚えると同時に、今までに感じたことのないほど巨大な罪悪感に襲われた。

「そういうことなので、今日は帰つていただいて結構です」

「はい、」迷惑おかげしました……」

説明が終わったようだ。麻都香がペニスと頭を下げ、礼を述べ。

「そ、行きなさい」

甘利が英吾の背中を押す。

「エイちゃん、行こうか」

麻都香が、足早に取調室を去っていく。それに遅れないよう、英吾もついて行く。その時、英吾が見た麻都香の背中は、ひどく寂しげだった。あの時から何も変わらない、あの背中。

何故自分を責めてくれないのか。

何故自分を愛してくれているのか。

こいつそのこと、この場で刺殺してくれればどれだけ楽か。

英吾には、何も分からなかつた。

もう隠すことなどできない。

もう、あの背中を、あの顔を見続けることはできない。

英吾は、真実を話す決意をした。

粉雪が舞い、外はあの時以上に冷え込んでいた。空には、寒さで震えるかのように輝く星が無作為に並べられている。

「ねえ……英吾。何あんなこと……」

警察署の前で麻都香は立ち止まり、純粋な瞳を英吾に向けた。

「燃やされたんだ」

「え？」

「せっかく作ってくれた手袋を燃やされたから。だから……」

英吾は、悔しそうに拳を握る。

「そりなの……。分かったわ、また作つてあげる」

その言葉が、ひどく英吾の心に染み渡り、思わず泣いてしまってうだつた。しかし、今はまだ泣く時ではない。

「ありがと、麻都香さん」

必死に笑顔の仮面を被り、感情を偽った。

「いい加減、私のことお母さんって呼んでくれないかな？」

「…………ありがと、お母さん」

英吾の言葉に、麻都香が屈託のない笑みを浮かべる。

もう限界だった。仮面に罅が入り、端からぼろぼろと崩れ落ちていぐ。その崩壊は、もはや誰にも止められない。

「どうしたの？」

麻都香が心配そうに英吾の顔を覗き見る。

「『いめんなさい』……」

「どうしたのよ」

麻都香は英吾の肩を持ち、崩れ落ちそうになる彼を支えた。

「僕が……僕が瑛一を殺したんだ」

英吾は口もつ、時に咽(の)み(むせ)ながら、すべて、包み隠さずに麻都香に語つた。五年前、川原に誘い込んだことも、瑛一に嫉妬していたことも、手袋を奪つたことも、麻都香のことを愛していましたとも、母親の愛が欲しかつたことも、燃やされたのは瑛一の手袋だったことも、すべて……。

「謝つて許してもらえるとは思つてないんですけど……。でも、僕はもう耐えられないんですよ！　ずっと、麻都香さんの悲しい顔を見続けることなんて、僕にはできない……」

完全に崩壊した仮面の下から出ってきたのは、悲しみをモチーフにした、道化師の顔だった。涙は、薄く積もつた雪の上に流れ落ち、少しづつ足元の雪を溶かしていく。

麻都香に、今すぐ殴り殺されても、何も文句は言えない。ぐっと力み、来る暴力に備えた。しかし、それは無意味な行動だった。

「知つてたわ」

まつたく予想もしていなかつた言葉が、麻都香の口から飛び出してきた。てつきり、呪いの言葉が囁かれるとはかり思つていたのに。

「ぼろぼろと涙をこぼしながら、麻都香を見上げる。涙で視界が霞み、彼女の表情が読みとれない。

「私ね、今日英吾君の部屋で日記を読んだわ。あの時、瑛一は手袋を燃やされたつて言つてたけど、違つたのね。本当は英吾君が持つて帰つっていたのね」

すべて、見通されていた。

「全部読んだの？」

「ええ、五年分、全部読んだわ」

日記には、冬廣瑛一が死んでから五年間の間に起つたこと、自分が感じたことなどを一切余財書き記していた。これを読んだということは、英吾のすべてを知つたということに等しいのだ。しかし、すべてを知つた上でも、麻都香は英吾を責めようとはしなかつた。

「だったら、何で

「英吾君を今さら見捨てられるわけないじやない！」

声を荒げ、麻都香は田に涙を溜めている。

「私たちは……間違つても親子なのよ？　日記を読んだ今だからこそ、親として、あなたを救わなきやいけない」

それと、と麻都香が続ける。

「死んでしまった人を生き返らせるなんて不可能なんだから。子供のあなたを恨んでも仕方ないって思ったの。それに、実際に手を下したのは、私の元夫なんだから」

「じゃあ……許してくれるの？」

麻都香は、ゆっくりと顔を左右に振る。

「ううん、許せない。私は、死ぬまであなたを許せない」

「やつぱり……」

英吾は肩を落とし、その場に崩れ落ちた。

「ねえ、英吾君。」ここで話し続けるのも良くないわ。ほら、警察の人が見てる……」

二人の数十メートル後ろでは、若い警察官が二人をさつきからじつと見つめている。明らかに不審者として見てている。

「場所を変えましょう。そうだ、あの公園がいいわ。この時間なら、人はそんなにいないでしょ？」

麻都香は英吾の手を取り、歩を進める。

麻都香と英吾は、目的地である公園へとやつてきた。

この公園は、最近できたばかりで、遊具や、中央に設けられてい  
る噴水など、何から何まで美しく、汚れの一つもなかつた。休日な  
どは家族連れで賑わい、一度ここへ来れば、荒んだ心も癒されると  
いうものだ。

しかし、今は人気がなく、どこか物寂しい雰囲気に包まれていた。

今年の春には一斉に咲き誇るであろう桜も、今はただの枯れ木に  
しか見えず、何とも言い難い裏を垣間見ることができた。まるで、  
咲き誇つた後、一斉に散る桜は、現在の東岸家のようであった。

「僕はどうすればいいんだよ……」

冷たく、凍えた両手で熱い頭を抱える。涙は止められたものの、  
またいつ泣いてしまうか分からぬほど不安定な状況に、英吾は陥  
つていた。

思えば、自分が冬廣瑛二に嫉妬をしたところから、すべてが始ま  
つたのだ。もう、あれから五年もの月日が流れてしまつていて。今  
さら、麻都香に罪が許される道理もなかつた。もう、英吾にはどう  
して良いか分からなかつた。

頭が痛んだ。

胸が押し潰されてしまいそうだった。

今すぐにも、舌を噛み切ってしまったから。

けれども、できなかつた。

死とこうむの恐ろしさを、瑛一から教わつてしまつたから。

きっと、瑛一も怖かつただろつ。

冷たかつただろつ。

苦しかつただろつ。

なのに僕は 。

歯を食いしばり、英吾は己の顔を引っ掻いた。爪が顔の肉に食い込み、鋭い痛みがはしつた。だが、そんなものは瑛一の味わつた苦しみの、麻都香が味わつている悲しみの一部にも相当しないことは英吾も分かつていて。しかし、自傷行為はやめられなかつた。

もう一度顔に手をやろうとすると、麻都香の温かい手によつて制止された。缶を落とす、乾いた音と共に。

「まったく、少しでも手を離すとこうだね？」

英吾は、麻都香の手の暖かさに、また涙が込み上げてきた。それをぐつと耐え、顔を強張らせた。

麻都香は、石のタイルに落とした一つの缶を拾い、その一つを英

吾に手渡した。ほんのりと暖かく、幾分か英吾の心を楽にした。

プルタブを引いて蓋を開け、口をつけ、少しだけ中の液体を飲んだ。

「熱つ」

缶よりも、中身が熱いことに頭が回つていなかつた。

「英吾君、あの時と変わつてないね」

麻都香はこくりほほ笑み、英吾の頭を撫でた。

「確かに、あの時が瑛二の死んだ日なんだよね。英吾君、ちつともそんな汚い部分を見せないから、私本当に気づかなかつた」麻都香は、缶コーヒーに口をつける。「本当に……私、気づかなくつて……」

「麻都香さんのせいじゃない！」

英吾は麻都香の両肩を掴み、じつと眼を見つめた。

麻都香は、零れ落ちる涙を拭いながら言つた。

「私ね、いつもやつて瑛二と一緒に語らうこと」が夢だつたの。でも、私は働くことで精いっぱい、ちつとも瑛二と遊んであげられなかつた

「僕のせいだ」

麻都香は英吾の言葉を無視して続ける。

「でも、瑛二が死んで、次は英吾君が子供になつた。英吾君は、私の生きる目標を奪つておいて、私に生きる目標を与えたわ。私、精いっぱい目標を達成しようつと思つた。いつもやつて、公園に来て、家

族で遊んで、瑛二とできなかつたことを……常に子供と心を通わせていたかつた。でも、敦司さんの、あの家族を想う心じゃ、それは実現しないんだなって思ったの。もちろん、その話は私にあるわ」

「僕が……」

「罪を抱えているのは、あなただけじゃない。私にも、瑛二を守れなかつた、そして英吾君をこんな風にしてしまつた罪がある」

明らかな強い意志を持つ田で、麻都香はしっかりと英吾のことを見据えた。

「英吾君。あなたは、どうしたい？」

「僕は……」

身を切り裂く風が吹く。

「私には、親としてあなたを救う義務があるわ。だから……」

麻都香は、隣に座り込んでいる英吾に顔を近づけ、小さく呟いた。

「だから、私と一緒に……」

午前八時。東岸敦司は目を覚ました。

ベッドの横に手を伸ばし、愛しい妻の体に触れようとする。しかし、既に彼女は起床しているようで、そこからは少しのぬくもりすら感じられなかつた。

昨夜夜遅くに麻都香と英吾は手を繋ぎ、肩を並べて帰つてきた。二人は傍から見れば歳の差カップルに見えたことだろ。敦司は、彼女らがここまで幸せそつた顔を見たことがなかつた。一体何があつたのだろうかと勘ぐつてみたが、何も思いつかなかつた。

「なんだ、あいつは休みだつていうのに早起きだな」

寝ぼけ眼をこすりながら、敦司は階下へと降りていく。

家は、異常なまでに静かだつた。

普段であれば、麻都香が起きていれば朝食の支度をしていくだろ。しかし、英吾は朝早くから部屋でゲームをしているはずだ。しかし、そのどけの音も聞こえてはこない。

あまりに静かすぎる空間に、敦司は身震いした。

居間を覗いてみると、やはり誰もいなかつた。

「なんだよ、一人揃つて出掛けたるのか？」

自分の声がやけに反響する。

ふと玄関の方に目をやると、鍵が開いていた。昨晩、麻都香と英吾が帰つてきた時に締め忘れたのだろうか、それとも、今朝出掛けた時に締め忘れたのか。

玄関の戸を開けてみると、外は清々しい、良い天気だつた。こんな日には、家族で出掛けるに限る。

「最近、ずっと家族サービスをしていなかつたし、今日は出掛けるかな……。そうだ、近所に最近できた公園にでも行こつか」

思えば、敦司はここ数年、家族サービスというものをしていなかつたし、麻都香にも迷惑をかけっぱなしだつた。英吾にいたつては、ほとんど会話すら交わしていなかつた。きっと、一人ともいい加減に愛想を尽かしていふことだらう。崩壊が訪れる前に、それに気づくことができたのは上出来だと、敦司は思ひ。今日は、一日を家族の為に使おうと思つた。

ふと、足元を見てみると、そこには英吾の右手の手袋と、麻都香の左手の手袋、そして、英吾の手袋と同じ型をした小さな手袋が、丁度手を繋ぐようにして重なつて落ちていた。

「なんだ、いんなとこで……」

敦司は三つの手袋を拾い上げ、ポケットへとしまいこんだ。そして、もやもやとした気持ちを払拭するかのように笑つた。

「早くあいつら、帰つてこないかな。さつさと出掛けないと、人で

いっぱいになるや。一体どこに行つてるんだ

敦司は、ぶつぶつと独り言をつぶやきながら、家中へと戻つていつた。彼の頭の中には、一人が喜ぶ姿以外の不純物が一切含有されていなかつた。

自分自身の記憶に、己が殺人犯になつたという不純物が入り込んだことなど、彼は永久に気づかなかつたのである。

？ あなた

「四人は皆、人を殺してしまった」

なんて悲しいんだろ？

「殺すと言つても、いろいろ種類がある」

社会的に、物理的に……。

「そうだね。君はよく分かっている」

「一人はどうなったんだろう？」

「さあ……。僕には何も分からぬ」

誰が、誰を殺す結果になつたんだろう。

「それも、僕は知らない」

私たちの知らないところで、こんなにも酷い」とが。

「それが現実だよ」

死者が人を殺す。

「それが最も悲しい」

生者が人を殺す。

「皆、気づきはしないけれどね。皆人殺しだ」

人は皆、本能的に人を殺したいのかな。

「きっとそうだろうね」

人は、死を望んでいるのかな。

「朽ちていくものへの憧れがあるだろ? うね」

私たちは、何なんだろう。

「その答えは、一生出ない」

分からぬ。

「僕たちは殺人犯、そして自殺志願者。これだけが真実だ」

じゃあ私も死のうかな……。

「それはいけない。本能に従つて生きては駄目だ」

何で?

「それが人間という生物だからだよ。殺さなければ生きていけない」

ふうん……。

「さあ、疲れただろう？ ゆっくりお休み」

うん。ありがとう。

私は、私たちが、一人の殺人犯であることを記憶に留める。

そうして、私はそつと目を閉じた。

(了)

? あなた（後書き）

Who killed him? はこれにて完結となります。  
ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

余談になりますが、この作品の真犯人は誰だと思いましたか？

英吾、瑛二、麻都香、敦司。

誰が誰を殺す結果になつたと思しますか？

正直、私自身も決めかねていますし、判断がつきません。  
是非とも真犯人を考えてみてください。

それでは

読者の方と、創作活動を愛するすべての人々に感謝と敬意をこめて。

また、次回作でお会いしましょう。  
お疲れさまでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2880p/>

---

Who killed him ?

2010年12月20日12時35分発行